

アルゼンチンと言えば牛肉である。

しかし、食べ物ネタは、“ 仕事に腹が減って困る ” という苦情を最近たくさん頂いたので、食の探検家の私としては不本意だが控えたい。

取りあえずアルゼンチンについて。

- 1.面積： 2,782 千 km² (我が国の約 7.5 倍)
- 2.人口： 3,626 万人 (01 年国勢調査)
- 3.首都： ブエノスアイレス (Buenos Aires)
- 4.人種： 欧州系 (スペイン、イタリア) 97%、インディヘナ系 3%
- 5.言語： スペイン語
- 6.宗教： カトリック



タンゴを踊ろう

で、アルゼンチンと言えばタンゴである。

かつて川崎の黒猫と言われ、現在音楽家の私としては、本場のタンゴを見逃す事はできない。心行くまで堪能したかったのだ。

タンゴを安く見せてくれる店もあるのだが、一般に観光客がよく行くという店のレベルは 100 ペソ(3,570 円)という。ディナー付きだともう少し高い。

で、あっさり諦めた。

CD で済まそうと。実は私、軽音楽家なのであった。



サッカーへ行こう

で、アルゼンチンと言えばやはりサッカーである。

中学時代には川崎のバティスチュータと言われた私である。サッカーを見逃す事はできない。

先のワールドカップではあっさり負けたものの、アルゼンチンはブラジルと共に揺るぎ無きサッカー王国である。

テニスの全豪オープンを見逃した私としては、タンゴを犠牲にしてもサッカーを見たいと思っていた。

ただ、対決ものに熱くなるお国柄、ましてやサッカーである。そして、現在はトヨタカップの南米地区大会という大きな試合が行われているので、チケットが手に入るのか分からない。いやそもそもスタジアムがどこにあるのかも分からない。当地の新聞を見たところで、ちっとも訳が分からない。

そんな時、旅行代理店にあった「GO FOOTBALL」というパンフレットに気が付いた。何でも、英語の話せるガイドが、ホテルの送迎、チケット購入をひき受けてくれるというサービスらしい。値段は、100 ペソ(3570 円)。アルゼンチンにしてはちょっと高いが、席も悪くないらしいのでこれで見に行くことにした。

ゲームは、アルゼンチンの地元チーム River 対パラグアイの Liertad というチームである(River はリバープレートとして日本でも有名らしい)。

スタジアムへ

迎えは 6 時半きっかりにホテルへやってきた。

本当にチリ人もアルゼンチン人も時間に正確な国民でとても意外だ。

車に乗り込み、幾つかの高級ホテルを巡った後、一路スタジアムへ。

スタジアムの近くではたくさんのお巡りさんが出ていて、交通規制をしている。

我々のバスも、迂回を指示されたのだが、運転手は何やらおもむろにあるカードを見せると、迂回する必要なく関門を通過。

さらに近づくと、一般の車は入れずに、大勢の人がスタジアムに歩いている。そしてずいぶん手前に特別なゲートが設けられていてそのでボディチェックを受けている。

我々の車は、それさえも何もなく突破。

スタジアムぎりぎりまで迫り、そして車を降りる。てっきり、みんなが並んでいる入り口から入るのかと思ったら、何と選手が車で入場するゲートから優先的に入る事に。

何と優遇されていることだろう。

スタジアム内

豪華な車が停まっているスタジアム内の駐車場を通り過ぎ、何やら関係者しか入れない廊下を歩く。この扉の向こうには選手がいる、というガイドの説明。そして行きついた先は、トロフィーなどが並ぶ展示場だった。そこには、本ゲームの対象であるトヨタカップも並んでいた。



何だか妙に、カップが並んでいてびっくり。歴史を物語っているような気がする。

さらに一行は、お土産屋さんに入る。何とお土産さんは営業開始前で、裏から入るのだった。開店したとたんにおびたたいしいファンが訪れるので、その前に好きなものをじっくり選んでね、という心憎いサービスなのだ。

このスタジアムは、地元アルゼンチンのリバー・プレートのホームグラウンドで、お土産もリバーのものであふれている。このリバーのチームカラーは赤と白だからなのか、ビールのバドワイザーがメインスポンサーらしい。このお土産屋さんでもバドワイザーが飲める。因みに 2 ペソ(71 円)で、東京ドームの 10 分の 1 以下だ。

観客席

8時半過ぎになって、いよいよ観客席に着いた。特等席ではないが、放送席がならぶ横で、かなり良い席の様だ。野球で言うところのバックネット裏の脇という感じ。そして外野に該当するところのアルゼンチン側だけだが、多くの熱狂的のファンで埋まりつつあった。

一方、パラグアイ側は閑古鳥が鳴いている。そのガラガラ具合はまるで日ハム対近鉄の試合みたいだ。観客席でサッカーが出来るに違いない。

このスタジアムは77,000人が収容できるらしい。この日は30,000人程度が来ていたが、恐らく28,000人はアルゼンチンファンだろうと言う感じ。それほど差があると言うのは、日本では甲子園くらいだろう。

グラウンドに直径2メートルほどのチューブが選手控え室から伸びてきた。てっきり、アルゼンチンの選手がその中を通して格好よく登場するのかと思ったら、審判とパラグアイの選手だけだ。アルゼンチンの選手は、そこを通らないでばらばらと登場して格好が悪い。

最初は不思議に思ったが、どうも、これは、パフォーマンスなどではなくて、敵の選手もしくは審判に対して、観客からものを投げつけられる為の予防策みたいだ。日本の試合を一度も見たことがないので日本の事情は良く分からないが、きっとここまではやらないだろうな。



日本と同じように、物売りが座席までやって来る。ちょっとしたお菓子をコーヒーなど。何故かビールは来ない。禁止なのかも。

座席の隣はチリ人だった。何でもアメリカのMBAへ入学する為、GMATを受けにサンチャゴからブエノスアイレスに来たのだそうだ。サンチャゴでもその試験を実施するが、ブエノスの方が安いらしい。サンチャゴ~ブエノス間は、チリの航空会社のランチリが、時々安いチケットを出す。往復でUS\$100だそうだ(空港使用料を入れるとUS\$150弱になってしまうが)。さすがにGMATを受けるだけあって英語は堪能。彼に一般的なチリ人の英語能力をたずねると話せるのは10%程度の人ではないかと。

麻薬王

一方、反対側の席はコロンビア人だ。3人家族でアルゼンチンに観光できたみたいだ。初めてコロンビア人を生で見た。

よく“南米”と一括りに言うが、実は【チリ、アルゼンチン組み】と、【それ以外組み】とに大きく分かれると思う。前者はヨーロッパであり、後者はあくまで南米らしい南米なのだ。書いていてむちゃくちゃだが、この気持ちをなんとなく分かって頂きたい。

チリ、アルゼンチンは、土着の民族をほとんど追い出し、もしくは殺戮してしまったせい、ほとんどインディオはいない。圧倒的に白人の国である。もう私ごとき日本人に取っては、ヨーロッパそのものだ。

一方それ以外の国は、白人あり、インディオあり黒人ありという感じらしい。現にこのコロンビア人は、黒人である。

まさに右側のチリ人と、左側のコロンビア人はそのままその違いを示していた。

またその違いは経済的にも治安、教育レベルの面でも大きい。チリとアルゼンチンは比較的安全なのだが、その他の国は結構問題が多いと言う。特にコロンビアは....

しかしコロンビアと言う国は、何が有名って麻薬である。基本的には貧しい国だから、海外旅行なんてそんなに簡単じゃないはずだ。

むちゃくちゃ偏見の固まりであるが、コロンビアからブエノスに観光できているその金は、麻薬で稼いだんじゃないかと疑ってしまう。

試合中、そのコロンビア人が私に向かって激しい怒りをぶつけてきた。銃で打たれるんじゃないかと思うほどの感情表現だ。もうオリバーカーンもびっくりだ。

街角でこれをやられたら私は完全にビビっていたはず。

彼の怒りの原因は、審判のジャッジがパラグアイに有利だったからだ。当然辺り一帯のアルゼンチン人は全員文句を言っている。

しかし麻薬王に言いたい。「そんなに凄い顔で俺に同意を求めるな！」

そして言いたい。「お前はアルゼンチン人か！」

たまたまアルゼンチンに来たからって、アルゼンチンを応援するなんて、全く節操のない。

因みに節操のある私はバドワイザーのファンだからアルゼンチンを断固応援している。

熱狂的応援団

ゲームはアルゼンチンが終始優勢だが、イエローカードが6枚も乱れ飛ぶ戦いで結構面白い。

アルゼンチン側の外野席では、もう猛烈な応援の歌がスタジアムに響き渡っている。地鳴りの様だ。

歌うだけではない。みんながびよんびよん飛んで盛り上がっている。まるでアフリカの何とか族みたいだ。何だか心なしかスタジアムが揺れている気がする。

終了間際にアルゼンチンがさらにゴールを決め、4 - 1でほぼ勝利を確実にしようとしていた。

ふと、南米の場合、勝利を抱き合って喜ぶのだろうか、と心配になってきた。

隣の麻薬王と抱き合うと、成田空港で麻薬犬に吠えられそうだ。そうなると荷物を徹底的に洗われ、中から芸術的写真集なんか出てこようものならたいへんである。

ゲームオーバーのホイッスルが鳴り、アルゼンチンファンは大喜び。

私もチリ人の方を向いていたので、結局コロンビア人には抱きつかれず、南米女性の芸術作品も守られそうである。

南米のサッカーも、熱狂的ファンによる衝突などがあって結構危険なことがある、と聞いていた

ものの、この日は圧倒的にアルゼンチンが勝利を収めたせいか、何だかみんな楽しそうに帰って行った。

内野側とも言えるこちらは、野球と同じく割と上品な応援だったので、今日のように安全ならば、今度は是非とも外野側の、無茶苦茶な盛り上がりも体験したくなる。

ただ、高いけど、GO FOOTBALL もなかなか素敵な体験だったことは書いておきたい。

翌日の新聞

翌日のスポーツ新聞は、各紙 1 面で取上げている。

私も 1 部買ってみた。

「これ幾ら？」

「xxxx xxx」

そんな事言われてもわからないのだ。

結局ポケットから小銭を全部出し、そこから取っていってもらって 1.3 ペソ(46 円)という値段ということがわかった。

こんな単純な会話が出来ないやつが新聞を買うと言うのもおかしい。



「CHO CHO」とはハッピーという意味らしい。各紙がこぞってこの日の試合を載せていた。やはり南米だ。

さて、昨日の試合であるが、1 面から始まって、トータルで 9 ページもの紙面が割かれていた。まるで阪神優勝みたいな勢いだ。

何が書いてあるのか分からないが、たった 90 分の試合でよくも 9 ページも割けるもんだと感心してしまった。

物価

ぶらぶら歩いてマーケット調査。

あるスーパー(SUPERMERCADO)での価格は下記の通り。

ビール(350ml ぐらい)	1.0 ペソ	36 円
ビール(970ml)	1.9	67
ヨーグルトドリンク(小)	1.2	43
コカコーラ(1.5L)	2.0	71
にんじん(1kg)	1.0	36
ピーマン(1kg)	2.0	71
じゃがいも(1kg)	2.0	71
トマト(1kg)	2.0	71
かぼちゃ(1kg)	1.5	54
レモン(1kg)	1.5	54
ステーキ肉(生肉で 1kg)	11.5	410

お店で一番安いワイン(750ml)	1.8	64
お店で一番高いワイン(750ml)	32.0	1,141

アルゼンチンは、為替の影響もあり、チリよりも物価が安い。大体2~3割くらい安い気がする。これまでの国でビールが最も安かったのはルーマニアかドイツだったが、ここブエノスアイレスに来て記録が更新された。ワインの一本64円何て、もう一体何が入っているんだっていう価格である。

因みに、マックのハンバーガーは、1.5ペソ(54円)でこれも世界中で一番安いかもしれない。因みにサンチャゴで食べたマックは、何故か無理矢理チーズが乗っていて、790ペソ(158円)だから、チーズを除いても100円以上になるはずで、勝負にならない。

そして、さすがアルゼンチン、肉がジューシーなのであった。今までで一番美味しかったマックはロシアで、これには適わない気がするが、2番目に美味しかったことは確実だ。ただロシアのマックは高く、アルゼンチンのマックは安い。

チリ産マックも悪くないが、アルゼンチン産に比べると見劣り、味劣りする。

アルゼンチンの牛肉 ステーキ編

アルゼンチンと言えば、やはり牛肉である。

もう読者は朝食を終えた頃と理解し、これを書き始めることにした。

まずは定番のステーキである。

【ビーフ・デ・チョリソー】と頼むと、サーロインステーキが出てくる。これはもうアルゼンチンでは定番料理で、大体どんな店にもあるようだ。ピザ屋さんでも当然の様に出てくるのだ。



アルゼンチンの標準的な焼き方はややウェルダンに近いので、私はいつもスーパーレアでね、とお願いしていた。

~大きさについて~

さすが南米、巨大である。400グラム以上はある。店によっては、“ハーフ”なんて気の利いた出し方をする。その“ハーフ”でさえ、日本のステーキ屋で出てくるものより大きいのでびっくりする。サラダなんかも容赦なくでかい。ビールも970ミリリットルだ。

~味について~

出されるステーキは実にシンプルである。自分で塩・胡椒をふって最終的に味を調えるようだ。しかし私はキッコーマンを持っている。これを数滴、いやでかいので十数滴たらすのである。

「最高の素材を、できるだけ自然のままで味わうことこそ至高の料理のはず」と海原雄山にしかられそうだが、

「フランス料理でさえ最近は醤油を使う。既成概念に囚われていたら、食文化は発展しない」と山岡四郎がむきになって言うので問題はなからう。

まっ、ともかく醤油をちょっとたらすと実にうますぎるのである。

ナイフで肉を割くと、これが実に柔らかい。こんなにでかいと硬い肉のイメージがあるのだが、それを一切否定するほどさくっとナイフが入ってしまう。そして中から肉汁がジワッと出てくる。因みに、アルゼンチンから日本への牛肉の輸入は、口蹄疫で禁止されている。日本にいと世界で最もうまいと言う牛肉が食べられないってのは実に残念だ。

~値段について~

もちろんお店によりけりだが、アルゼンチン人が行くようなお店では、

- ・ビーフ・デ・チョリソーは、大体 7 ~ 15 ペソ(250 ~ 535 円)
- ・サラダは、3 ~ 7 ペソ(107 ~ 250 円)
- ・ビール(970ml)は、3 ~ 6 ペソ(107 ~ 214 円)

パンは無料食べ放題のやつが出てくるので、これだけ食べて、13 ~ 28 ペソ(464 ~ 999 円)というのは幸せというより他ない。アルゼンチン万歳！

アルゼンチンの牛肉 すき焼き編

海外で日本食というのは、自炊でもしない限り、貧乏旅行者にはまず縁がない。

理由は高いからである。それでも美味ければ食べたくなるのだが、さらに味が今一つだからである。まあ、海外で、日本で食べる以上の味を求めてはいけない、というのは不文律であるのだが、ここブエノスアイレスの日本料理屋(因みにお店は“日本橋”という)のすき焼きはもう絶妙の味だ。経営者は日本人なので、もう問題なく日本の味なのだが、やはり肉が異常に美味しいのである。

こんなに美味いすき焼きを食べたのは、間違いなく私の人生で初めてで、感動ものであった。



従業員は若い日系人女性達。着物を着て給仕してくれる姿が何とも郷愁をさそう。

痩せても枯れても.....、訂正。肥えても太っても、これでも元商社マンである。商社は、世界中にオフィスがあるのが嬉しい。このすき焼き、実はブエノスアイレスの先輩にご馳走になったのだった。ゴチとなると、さらに美味さが増すのは私だけではないはず(S先輩、有り難うございます！)。

因みに、すき焼き 1 人前の値段は 35 ペソ(1,250 円)なので、観光でブエノスに行かれた方は是非お試しになっては如何でしょうか。尚、この店の生卵は全く問題ありません(お替わりをしてしまうほどの美味)。

アルゼンチンの牛肉 焼肉編

ステーキ、すき焼きを食べてしまうと、何がなんでもアルゼンチン肉の焼肉を試してみたいくなる。

いろいろと情報を集めると、このブエノスアイレスに韓国街があるらしい。カラボボという場所だ。しかし、残念ながら、既にイグアスに移動しなければならず、一回は断念したのだった。

イグアスからブエノスアイレスに戻る機内ではサンドイッチが出たのが、全くうまくなく、かつ量も少ない。

そしてライブレポートを打っていたので、朝食・昼飯を食べておらずとても腹が減っていた。やはり、カラボボという韓国街に行き、どうしてもキムチが食べたくなくなってしまった。

既に夕方なのだが、空港からレミースに乗りカラボボへ直行することに。レミースとは、空港と市内を結ぶタクシーみたいなものだ。場所を言ってその場でお金を払う仕組み。普通のタクシーもあるのだが、分からない場所へ行くのに、へたにタクシーでウロウロするよりは確実だろうという判断だ。

何と 24 ペソ(856 円)。とても高い……、が、そもそもカラボボがどこにあるのか分からないので何とも言えないところであるが。

実は、無茶苦茶遠かった。

アルゼンチンの道は結構広いので、渋滞をしていなければ車はバンバン飛ばす。それでもカラボボへ空港から 25 分くらい掛かってしまった(市内からは 20 分ほど)。

ずいぶん遠くへ来てしまった気がする。

そして実はこのカラボボ、地区ではなく通りの名前だった。従って長い長い。5 キロ以上はあると思う。運ちゃんは、通りをのろのろ走ってくれる。所々にハングル文字があり、それなりに韓国レストランがあるのだが、一体どこに入ったら良いのか決めかね、全く迷ってしまう。

一ヶ所、ハングル語の看板が密集しているところで降りてみた。八百屋と食堂の他数軒が商売をしている。

冷やかして八百屋に入ると、中は食料雑貨を扱っていた。もちろん韓国系の食材が多い。

韓国海苔がおいしそうだったので買ってみることに。

英語で「これ幾ら？」と聞くと、「サンエンよ」と日本語で帰ってきた。

相手は、韓国人とアルゼンチンのハーフの様なおばちゃんだ。「サンエン」とは「3 ペソ」の事を言っているのだった。

しかし、韓国街で英語を使ったからとはいえ、一発で日本人と見抜かれてしまったのは驚いた。

同時に、アルゼンチンの韓国街で日本語が通じてしまうのも驚きだ。

余談だが、この韓国海苔、大判で 10 枚ほど入っている。韓国製だと思うのだが、3 ペソ(107 円)とはずいぶん安い。

日本ではこの値段で手に入らないはず。何で地球の裏側に運ばれたものの方が安いんだろう。

このおばちゃんに、「この辺りで焼肉の美味しいところはない？」と聞くと、「この近くにある。絶対あそこよ」とある店を教えてくれた。

お店の構えと看板はごく普通なのだが、ドアにはカギが掛かっていた。はて、営業終わりか、と思っていると、後ろから韓国系の若者が来てベルを押すんだと教えてくれた。彼は常連さんみたいだ。

中へ入る。店は広く、また天井が高い。テーブルを仕切るついでには、病院にあるみたいなもので、お店は全く高級感はない。

しかしとても繁盛していて、「隠れた名店」を発見したような気分になった。

先の若者が通訳してくれるには、ここはメニューはないと言う。あるのは飲み物と単一料理。彼に「キムチと焼肉を食べに来ただけ」と言うと、それは大丈夫という。

Imperial という、アルゼンチンでは多分一番うまいビールを頼み、その単一料理を待つ。

テーブルの中央に置かれる火は炭火だ。

そして料理が運ばれてきた。アルゼンチン牛肉が真ん中にどかん、ジュジュウッ。そしてキムチがその回りに 10 品。

単一料理の値段は 15 ペソ(535 円)と聞いていたので、これだけで感激してしまい、早速写真を撮ってみた。

取り終わって、キムチから食べだすと、何と今度は韓国お好み焼きのと魚のフライを持ってくるではないか！

そして欠かせないご飯。慌てて写真を撮り直した。

さて、食べるか、と再び箸をつける。

とその時、さらにチゲ鍋と水餃子の登場である。結局 3 回も写真を撮ることになって感激倍増だ。

で、肝心の味もいける。さすがアルゼンチンの牛肉である。先日のすき焼きも実に肉がうまかったが、韓国焼肉になっても抜群にうまい。韓国焼肉はちょっとタレが甘いので、再びキッコマンの登場だ。

これだけうまいと、やはり例の S 先輩に、こんな店がありましたよ、と紹介したくなる。そう思いお店のカードをもらう。ハンゲル語だ。先輩にどう伝えたらいいかと考えていると、何と

何と目の前にその先輩が姿を現わした。唖然とした。この広いブエノスで偶然会うなんて一体どんな確率なんだろう。先輩は、他の会社の駐在員と、この店で食事をしていただけだった。

このお店、美味しいのみならず、偶然とは言え、なかなか憎い演出をするもんだ。

たぶんつづく



キムチの味も、ごはんの味も申し分ない。残念なのは、量が多くて全て食べられない事。お好み焼きは持ち帰りにしてもらった。